

徳富蘇峰と吉野作造：1910年代までの中国観を比較して

吉水，和
九州大学法学部

<https://doi.org/10.15017/7343129>

出版情報：学生法政論集. 19, pp.37-51, 2025-03-25. Hosei Gakkai (Institute for Law and Politics) Kyushu University

バージョン：

権利関係：



徳富蘇峰と吉野作造

—1910年代までの中国観を比較して—

吉 水 和

〈目 次〉

- (第一章) はじめに
- (第二章) 両者の人物像と関わり
- (第三章) 両者の中国観①：中国社会への目線
 - (第一節) 徳富蘇峰の着眼点
 - (第二節) 吉野作造と改革期の中国社会
 - (第三節) 両者の比較
- (第四章) 両者の中国観②：日中関係について
 - (第一節) 日清戦争後から1910年代までの日中の出来事
 - (第二節) 徳富蘇峰の日中関係強化論
 - (第三節) 吉野作造の日中親善論
 - (第四節) 両者の比較
- (第五章) おわりに

(第一章) はじめに

明治・大正期には国内情勢また国際関係の変化のなか、海外への意識も高まり、とりわけ隣国中国に対しては関心が集まった。この時期には、思想家・知識人によって多くの中国論が発表されている。こういった中国論を分析・比較することは、当時の日本における対外認識を理解するとともに、当時の日本自身への認識を考察する一助となるといえる。数多く存在する中国論の中で、本稿では、徳富蘇峰と吉野作造の日清戦争後から1910年代までの中国観を中心に上げ、それぞれの中国論を整理、比較し、共通点及び相違点とその背景について考察することを目的とする。

徳富蘇峰の中国観については、板倉弘明氏の『徳富蘇峰の中国観』に関する研究史の一考察¹でまとめられているように、日清戦争前後を中心に時代背景を踏まえたうえでの中国観の研究や、中国への二度の旅行記の分析などがある。近年の研究としては、藤田昌志

¹ 板倉弘明『徳富蘇峰の中国観』に関する研究史の一考察（『城西国際大学日本研究センター紀要』、2巻〔2008〕）79-86頁。

氏の「徳富蘇峰の日本論・中国論」²があり、日清戦争前後の徳富の著作と時代状況を参考に、彼の日本と中国に対する視点を取り上げている。

吉野作造の中国観については、1915年の対華二十一カ条要求に対する吉野の姿勢についての先行研究が複数存在する。この吉野の姿勢については、彼を帝国主義と捉える批判的な言説やそれとは逆に吉野の国際協調主義を評価する研究が存在している。近年大川真氏の研究³では吉野が帝国主義者であるという根強い言説への反証が為された。その他、吉野の中国観について網羅的に追った広野好彦氏の「吉野作造中国論おぼえがき」⁴や、吉野と中国の関わりの大枠を捕らえた尾崎護氏の『吉野作造と中国』⁵といった文献が存在する。また、吉野と他の思想家の中国観を比較した研究として、山根幸夫氏の「日本人の中国観―内藤湖南と吉野作造の場合―」があり、対華二十一カ条要求や五・四運動に対する、吉野と同時代の中国研究者である内藤⁶との対照的な姿勢について述べられている。

このように徳富と吉野、それぞれの中国観についての分析や、どちらかと同時代の中国研究者とを比較する先行研究は存在している。しかし、直接両者の中国観を比較するものは見当たらない。両者は同時代を生きた影響力のある論者であり、中国専門の研究者ではないものの、中国に関しても多数の論考を発表している。徳富と吉野を比較することは、当時の日本社会でどのような中国認識が為されていたかを深く理解するうえで、重要である。

両者の中国観を検討するうえで、本稿では2つの観点に注目することとした。1つ目は、中国社会に対する目線、2つ目は日中関係についての目線である。まず第二章で両者の人物像と交流を抑えたのち、第三章では中国社会をどのように捉えていたかを、第四章では日中関係についてどのような視点を持っていたかを比較する。そして検討した中国観を踏まえ、第五章では中国観から見える自国日本に対する両者の認識を考察していく。

（第二章）両者の人物像と関わり

徳富と吉野の中国観を比較する前に、まずは両者の人物像と関わりについて触れる。

徳富蘇峰（1863-1957）は熊本県出身で、ジャーナリスト・思想家として明治・大正・昭

² 藤田昌志「徳富蘇峰の日本論・中国論」（『比較文化研究』、No.96〔2011〕）13-25頁。

³ 大川真「吉野作造の中国論―対華二十一ヶ条からワシントン会議まで―」（『吉野作造記念館吉野作造研究』、第14号〔2018〕）102-118頁。

⁴ 広野好彦「吉野作造中国論おぼえがき」（『法学論叢』、121巻6号〔1987〕）48-81頁。

⁵ 尾崎護『吉野作造と中国』（中央公論新社、2008）。

⁶ 内藤湖南（1866-1934）は秋田県出身の中国研究家。新聞社で働くなかで度々中国へ渡航し、中国研究へ力を注いだ。後に京都大学の教授となり東洋史学科を創設した。中国観を表した著作として『支那論』（1913）、『新支那論』（1924）がある。山根幸夫「日本人の中国観―内藤湖南と吉野作造の場合―」（『東京女子大学論集』、19巻1号〔1968〕、3頁）を参考。

和にわたり、終生幅広い活躍を見せた人物である。父は横井小楠の高弟ともいわれた、実学党の一員であり、徳富は幼い頃から政治への関心を持って育つこととなった。熊本洋学校に入学後、キリスト教に触れ、1876年に横井時雄・海老名弾正らにより結成された熊本バンドにも参加する。その後、同志社英学校（現在の同志社大学）に入学し、キリスト教の洗礼を受け、学問と信仰に専心する。同志社の創立者である新島襄に対し徳富は尊敬の念を持っており、同志社の退学後も新島との交流は続いた。熊本へ帰郷後は大江義塾を立ち上げ、自由民権運動にも身を投じた。そして発表した『将来之日本』（1886）は、当時の若者に多大な影響を与え、雑誌『国民之友』では論壇の先導者となった。当初は「平民主義」を唱えていたが、日清戦争後の三国干渉を受け、帝国主義に変節したと指摘されている⁷。徳富と中国との関わりについては、漢籍を愛好していることと、中国への滞在記を残していることが主に挙げられる。漢籍については、論稿にしばしば引用が見られるほか、『漢籍を観る・思想を観る』（1935）を発表している。中国滞在記については、『七十八日遊記』（1907）と『支那漫遊記』（1918）の2作があり、これらには旅行時の日記の他、当時の中国に対する雑感が記録されている。この2作は、後に彼の中国観を検討する際に再び言及することとなろう。

吉野作造（1878-1933）は宮城県の商家に生まれた。当初は数学や哲学に関心を持っていたが、第二高等学校（現在の東北大学）入学時に法学を専攻と決め、また在学中にはキリスト教へ入信した。その後東京帝国大学法科大学へ入学し、法学や政治学を熱心に学んだ。在学中には、海老名弾正に出会い、大きな影響を受けた。1916年に発表した「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」では「民本主義」を唱え、後に大正デモクラシーの先導者と言われるようになった。吉野は中国とは、東大法学部の助教時代に、1906年から三年間天津へ赴任し、袁世凱の長男克定の家庭教師として働いたことがきっかけで関わりを持つようになった。帰国後の1910年代には、二十一か条要求への姿勢を論じた『日支交渉論』（1915）、辛亥革命の概要とそこに至るまでの歴史を記した『支那革命小史』（1918）など、多数の中国論を発表した。この時期の中国観については、後ほど詳しく検討する。1920年代には、五・四運動を受け、中国の革命派の学生を支援している。また、1930年代にも『対支問題』（1930）などの中国に関する論考が複数見られ、このように吉野も長年中国へ関心を持った人物だったといえるだろう。

それでは徳富と吉野にはどのような関わりがあったのだろうか。両者の共通点としては、時期は異なるものの徳富は「平民主義」、吉野は「民本主義」を掲げ、その内情は異なるもののどちらもデモクラシーを志向していたこと、またキリスト教を信仰していたことが挙げられる。このキリスト教の繋がりもあり、吉野は1909年に海老名弾正の紹介で、徳富と出会っている。1909年というと徳富がすでに帝国主義者になり、変節したと言われる時期

⁷ 和田守『徳富蘇峰 人と時代』（萌書房、2022）110-114頁等で指摘される。

である。一方で吉野はこの後に「民本主義」や平和論を提唱している。平和論について補足すると、吉野は第一次世界大戦頃から軍縮や国際協調を支持する論を展開し⁸、三・一独立運動について論じた「対外的良心の發揮」（1919）でも「国際民主主義」を基本とした外交関係の構築をその冒頭で述べている⁹。こう見ると、徳富と吉野はその思想においては逆方向へ進んでいるように思える。しかし両者の関係は良好であり、紹介後は書簡のやりとりを重ねていた。徳富は吉野の欧州留学の際に、留守宅の生活費の援助を後藤新平に依頼しており、吉野の日記にも、この際の徳富とのやり取りを示した記述がみられる¹⁰。また、吉野は「蘇峰先生の『大正の青年と帝国の前途』を読む」（1917）¹¹などで徳富の論考の論評をしたほか、1916年には、自ら編者となって徳富の設立した民友社から『現代叢書』を刊行している。このように関わりが深く、共通点がありながら、同時期に異なる思想を持っていた徳富と吉野は、1910年代までの中国に対してどのような考えを持っていたのだろうか。

（第三章）両者の中国観①：中国社会への目線

まずは両者の中国社会への目線を取り上げる。中国社会や中国人に対して、徳富と吉野はどのような評価を示していたのだろうか。

（第一節）徳富蘇峰の着眼点

徳富は中国社会について、その歴史文化に対し高い評価を与えており、『七十八日遊記』でも、『支那漫遊記』でも、中国滞在中にさまざまな歴史的遺跡に滞在して感激する様子が綴られている。『支那漫遊記』の中では、中国の文明について評するこのような一節がある。

世人は支那を目して、老大國と云ふ。固より然り。世人は支那が老朽を説く。されど吾人は寧ろ、總て舊國が、空しく史上に存するに拘らず、單り支那が最古の歴史を、最新の今日迄、繼續保持しつつあるに、驚嘆せずんばあらず¹²。

⁸ 例えば、吉野作造「軍備縮小論」（1917-1921、同『世界平和主義論』、新紀元社、1947、103-158頁）、同「民本主義と軍國主義」（1918、同上159-167頁）が挙げられる。

⁹ 吉野作造「対外的良心の發揮」（『中国・朝鮮論』、平凡社、1970）137頁。

¹⁰ 吉野作造『吉野作造選集13』（岩波書店、1996）96頁。以下『吉野作造選集』（岩波書店、1995-1997、全15巻及び別巻）を、『選集（巻数）』と略記する。

¹¹ 吉野はここで「明治の初年より大正の初めに至る青年の思想の変遷史として見れば非常に面白い」が、「現代の社会並びに現代の青年に関する適當なる理解の欠如」が見られるため、徳富の書で現代の青年を導くことは難しいと評している（「蘇峰先生の『大正の青年と帝国の前途』を読む」〔1917、『選集3』〕、175頁）。

¹² 徳富猪一郎『支那漫遊記』（民友社、1918）512頁。なお、以下引用文を示す際、漢字仮名遣いは引用

また、「何人も自から支那化し、支那人化するを禁ずる能はざる可し」¹³と、徳富は中国の文明について同化力があるとも評している。「蓋し支那文明は、無意識の裡に、他を催眠術に誘ふ底の魔力」¹⁴を持っているとも考えた。この同化力に徳富は一種の警戒感も持っており、日中親善は望むものの、日本が中国の文明に同化することに対しては否定的に捉えているようである¹⁵。その他、中国の歴史上の人物を評価する文章や、漢籍を読み分析する小文も数多い¹⁶。漢籍が主題でない作品においても、『孟子』や『老子』などからの引用が頻繁になされている。こうしたことから、徳富の中国文化に対する教養の高さと中国文化への尊敬が見て取れる。同様の理解は先行研究にも示され、藤田氏は徳富の教養が「中国蔑視を抑制した」¹⁷との見解を示している。

また徳富は中国の人口の膨大さについても、繰り返し言及し、苦力についても、「人種的生命」「國民的元気」を維持しているのは苦力と評価し、「支那の恩人」「救世主」「苦力大明神」とも称賛している¹⁸。さらに徳富は中国の政治について、歴史的に君主の徳に人民が服し人民の帰服に従って君主は君主権を行使する体系をとってきたと分析し、中国には元来「民政の思想」があり政治主義が存在するとすればそれは「民主主義」だと評価している¹⁹。また中国には「天地懸隔の先天的階級なく、將た日本従来の封建制度程の士族、平民の區別さへ無」とし、科举制度についても、「其の原則は、自由競争法」と指摘して、こうした観点から徳富は中国が「一大平等國」であり「一大自由國」との評価を与えている²⁰。

一方で徳富は中国人の国民性に対しては、文弱的である、弱者の立場から考え断念しやすいといった、比較的消極的ともとれる評価をしている²¹。特に公共性がない、利を求めすぎるきらいがあることについては批判的な目線を向けているようである。とりわけ『七十八日遊記』では、中国人には「正邪の標準なくして、利害の打算」があり、利に関わる事を除いて「熱心にならず、又た眞面目にならず候」と批判している²²。また、中国人の持つ利の觀念についても、「所謂る利己の利」と指摘し、公利については「藥にしくも見

元の表記に従うものとする。

¹³ 同上、523頁。

¹⁴ 同上。

¹⁵ 同上。

¹⁶ 例として、「海舟先生と詩經を讀む」(1894) (『蘇峰文選』、民友社、1915)、413-414頁)、「諸葛孔明」(1895) (同上401-407頁)がある。なお、以下『蘇峰文選』は『文選』と略す。

¹⁷ 藤田昌志「徳富蘇峰の日本論・中国論」(『比較文化研究』、No. 96 [2011]、21頁)。

¹⁸ 徳富猪一郎『七十八日遊記』(民友社、1906) 312頁。

¹⁹ 同上、276-277頁。

²⁰ 同上、278-279頁。

²¹ 同上、235-239頁、242-245頁。

²² 同上、245頁、253頁。

出し不申候」と述べている²³。さらに「支那漫遊記」においても、「利の一字は、支那人の生命」²⁴と述べていることから、徳富にとって中国と利は強く結びつけられる観点だったことがいえる。

（第二節）吉野作造と改革期の中国社会

吉野の場合、文化論や人種論もあるが、社会改革に焦点をあてて中国について論ずる文を多く残している。

「支那人の形式主義」（1906）の中では、中国には先生という立場を尊敬する美風があるが、この尊敬には形式主義の側面が強いとの考えを述べている²⁵。また、その他、纏足や婚礼のような当時の中国文化にもこういった形式主義の影響が見られるとも指摘している²⁶。ただ、こうした中国の形式主義については、決して悪意からくるものではない、単なる文化的風習なので仕方がないことであるとの評価を吉野は行っている²⁷。

「再び支那人の形式主義」（1906）の中では、改革の視点から形式主義的側面に批判が加えられている。形式に縛られていることが要因となって「人類本性の自然的煥発が著しく妨げられて居る」ために、「著しく独立自由の思弁と云うことが乏しい」と吉野は指摘する²⁸。さらに「独立自由の思弁が乏しいから、したがって亦高遠なる理想と云うものがない」²⁹とも述べている。そして、改革の精神がないため平民は不都合な制度に疑義を挟まず、一方で官吏は私利私欲を満たしているとも批判している³⁰。このような既存の制度に疑義を挟まず不平があっても諦める姿勢や、立場が上の者がそれを笠に着て下の者に横暴に振舞う傾向を、『支那革命小史』の冒頭でも、商人に暴力をふるう下士や田舎の民に横暴を働く官商の姿をとりあげ、それに対し「お上に物を売るのは斯ういふもの」として人々が諦めるという例を示し、吉野は指摘している³¹。

しかしながら吉野は決して中国に対して批判的な目線のみを向けていたわけではない。『支那革命小史』の序では、吉野自身は「多大の同情と敬意とを支那民族に払はんとする立場をとる一人」³²であることを明らかにし、その革命史と革命の原動力となった人々への敬意を表している。こうした吉野の姿勢について、狭間直樹氏は「中国人の改革能力を

²³ 同上、256-257頁。

²⁴ 徳富、前掲『支那漫遊記』、542頁。

²⁵ 吉野作造「支那人の形式主義」（『選集 8』）174-175頁。

²⁶ 同上、176-180頁。

²⁷ 同上、175頁。

²⁸ 吉野作造「再び支那人の形式主義」（前掲『中国・朝鮮論』）15頁。

²⁹ 同上。

³⁰ 同上、17-21頁。

³¹ 吉野作造『支那革命小史』（『選集 7』、岩波書店、1995）12-13頁。

³² 同上、3頁。

確信してはばからない、時流に抜きこんでた」見解だったと評し、それゆえ当時から批判が多かったものの、吉野自身は見解に自信を持っていたことを明らかにしている³³。吉野は中国国民の力を信じていた。その力への期待と信頼が、五・四運動後の革命派の支援につながったのだ。

また、「満韓を視察して」（1916）においては、中国社会では日本の近年の勃興の影響を受けて愛国の機運が高まっていると述べ、同時にこの愛国心には排外的側面もあるため、日本は満州において必要以上の政治的野心を見せてはならないとも指摘している³⁴。同様の注意は、吉野の中国関連の論に繰り返し見られており、吉野が中国社会や中国人を支配すべき対象と見ていたにしてもそこには一定の尊重が必要と考えていたことが分かる。

このように、吉野は改革への意識から中国社会を見ることが多く、中国で革命が勃発した1910年代とそれ以前を比べると、革命開始後に中国社会へ肯定的評価を与えていることが分かる。そして、中国自身の能力を評価し、日本の過度な中国社会への干渉について警鐘を鳴らしていたことも分かる。これらを踏まえて徳富と吉野の観点を比較していく。

（第三節）両者の比較

両者の中国社会への目線には似通った面があると指摘できる。両者は中国社会に対し一定程度の肯定的な観点を有している。どの点を肯定的に見ているかは異なっており、徳富は歴史や文化・人口面について、吉野は改革・革命の状況や革命を動かす人々についてそれぞれ高く評価している。中国文明や中国の人口への指摘は、同時期の内藤湖南『支那論』（1914）や中村久四郎『極東の民族』（1916）³⁵にもみられており、当時の中国一般に対する認識としてこの二つは主流なものだったといえる。徳富と比較すると、革命に絞り込んだ吉野の中国社会への見方は少し異質なものかもしれないが、吉野が中国へ注目し始めたのがこの革命の時期と重なるため、そこに焦点が当たるのは自然な流れとも考えられる。このように評価点は異なるが、徳富と吉野、両者とも中国社会を単純に蔑視するような視点は有していないことが分かる。その他、両者とも中国人に諦めの観念があると指摘していることが共通点としては挙げられる。

両者の相違は「利」を求める中国人への評価からうかがえる。「利」と中国人の関係への注目の高さは徳富の特筆すべき点である。吉野も確かに中国人と利の関係について触れてはいるものの、官吏の腐敗の文脈で述べていることから、中国社会全体が利にとらわれていると指摘しているわけではない。しかしながら、徳富は前述の通り「利」と中国人について何度も述べており、利との接近についても多少の批判的目線が向けられていることが

³³ 狭間直樹「〈解説〉吉野作造と中国—吉野の中国革命史と日中関係史について—」、同上414頁。

³⁴ 吉野作造「満韓を視察して」（前掲『中国・朝鮮論』）96-98頁。

³⁵ 本書は、民友社より徳富監修・吉野編で出版された『現代叢書』の一冊である。序文より著者が中村であるとうかがえる。

分かる。徳富が利己主義を批判しているのは、公德や公共心の欠如に繋がると考えているからである。この公德や公共については、他著作でも、徳富は繰り返し言及しており、公德が愛国心に繋がるといったことや、教育によって公德や公共心を普及させようといった論を唱えている³⁶。中国という他国に向ける目線の中でも、徳富が私利と公德という対立する観念をあげ、私利を否定し公德を重んじているというのは、彼の国家主義的姿勢に沿っているといえる。

吉野に特徴的な点としては、日本と絡めて中国社会を語っていることである。徳富が日本と中国を比較していないわけではないが、どちらかというと中国の比較対象としてはイギリスを挙げ、両国の共通性を語っている³⁷。このことから、日本と中国は隣国ながら全く違うものとして理解しようとしていることがいえる。一方の吉野は、中国社会を語る文脈で度々日本の影響や日本が中国社会とかかわるうえでの注意点を述べている。吉野のこうした論からは、常に中国との関係を意識する彼の姿勢が浮かび上がってくる。この関係観については次項より詳しく見ていく。

（第四章）両者の中国観②：日中関係について

続いて両者の日中関係論について検討するが、その前に日清戦争頃から1910年代までに、日中でどのような出来事が生じていたのかに触れておく。

（第一節）日清戦争後から1910年代までの日中の出来事

まず日本についてだが、対内的には議会政治が少しずつ安定を見せていった時期だとまとめられる。1894年の日清戦争の前頃から、帝国憲法の発布や衆議院選挙の実施など、日本では国内の政治体制が段階的に整備されていった。1900年には立憲政友会が成立し、政党政治へ前進を見せる。対外的には、日清戦争後の下関条約で、領土と多額の賠償金を獲得し、国際的な地位を上昇させていた。1902年には日英同盟を結び、1904年には日露戦争を戦った。1910年は韓国を併合し、第一次世界大戦期には1914年にドイツへ宣戦布告して青島での戦闘を行い、1915年には対華二十一条要求を袁世凱に突き付けている。日清戦争後から1910年代は日本が、海外進出の動きを拡大した時期といえる。

³⁶ 徳富は「社會に於ける思想の三潮流」（1893）において「愛國心は國民の公德の重なるもの」と述べている（『文選』、195頁）。また、「政治的教育と新聞紙」（1903）では、「公共的感情の教育」を重要視するアメリカの識者の言を取り上げ、それに同調の意を示している（同上639-646頁）。

³⁷ 徳富、前掲『七十八日遊記』、317-324頁。このなかで徳富は、中国人とイギリス人の共通点として、個人主義や不干渉主義であること、儀式を重んじることをあげている。その一方で相違点としては、中国人が放任と個人の利を重んじる一方で、イギリス人は自由と個人の権利を重んじていることなどをあげている。

中国の場合、日清戦争後の敗戦後、一気に列強からの侵略を受けることとなった。1900年には義和団事件が起こり、「滅満興漢」のスローガンを掲げて各地で暴動がおこったが、各国の軍隊に鎮圧されますます諸外国からの影響下に置かれることとなった。1911年に辛亥革命がおこり孫文によって中華民国が成立するも、その後袁世凱が臨時大總統となると帝政復帰への試みがなされた。1915年の二十一か条要求を受け入れるが、列強からの長年の圧力に対し、国民の反発も強まり、1919年には五・四運動が発生した。中国における1910年代までは、内政では革命が起き、対外的には列強からの強い圧力にさらされ続けるという激動の時期であったといえる。

このように、日清戦争後から1910年代までは日中両国ともに変化が激しく、また両国間の接触も多かった時期であった。

（第二節）徳富蘇峰の日中関係強化論

徳富は日清戦争の少し前から、日本の利益と絡めながら中国について繰り返し言及を行っている。「支那を改革する難きにあらざ」（1887）では、中国へ鉄道を敷設することの意義について語っている³⁸。「日本国民の膨張性」（1894）では多人種との比較をしつつ、近年の日本の人口増加と対外膨張の機運を述べているが、その膨張性を遮る要因として、気候と中国の存在をあげ、「但た我か國民か世界の各所に膨張するに際し、其の大敵たる可きは白哲人種にあらずして、支那人種たるを忘るゝ勿れ」³⁹と主張している。日清戦争後に発表した、「征清の眞意義」（1894）では、清へ勝利したことで日本の国際的地位が高まったと言及している⁴⁰。日清戦争前の中国の言及を総合しても、徳富にとって日本の発展を考えるうえで中国は意識すべき存在であった。こうした中国への意識は、後の時代において強まっている。

1910年代の『支那漫遊記』においては、日中関係についての言及が特に頻繁になされている。徳富は日中親善のために、力、利益、思想及び感情の3つの要素を挙げている⁴¹。力というのは、日本が力を尽くして中国を支援する姿勢を示すことである。利益というのは、日中相互で経済上の利益を共通させることである。徳富は中国自身の経済発展についても言及しており、鉄道や銀行における日本の関与の重要性を述べている。鉄道の敷設については、日本も欧米同様利権をさらに主張すべきとの考えを持っており⁴²、銀行については、中央銀行を中国に創設し、その管理を日本人の手に担わせるのが良いと主張してい

³⁸ 徳富蘇峰「支那を改革する難きにあらざ」（『文選』）48-58頁。

³⁹ 徳富蘇峰「日本国民の膨張性」、同上298-299頁。

⁴⁰ 徳富蘇峰「征清の眞意義」、同上332頁。

⁴¹ 徳富、前掲『支那漫遊記』393-394頁。

⁴² 同上、550-551頁。

る⁴³。思想及び感情というのは、両国民の思想・感情を共通させることを示している。共通させるための手段としては、「プロパガンダ」の重要性を徳富は訴え、欧米と比較して日本が中国においてプロパガンダの利用を怠っていると批判している⁴⁴。徳富は中国における言論の力を兵力に比すると評しており⁴⁵、それ故に新聞や雑誌などの言論を先導するメディアの役割に期待している。徳富は「興亜の一大新聞」⁴⁶の発行を希望している。また、徳富は中国と日本が同文の国であることに着目し、日本語教師や日本語教育の重要性についても言及しながら、現状ドイツ語や英語の勢力が拡大していることに危機感を示している⁴⁷。

このように見ていくと、『支那漫遊記』のなかで、徳富は日中の親善関係の構築を日本の利益の拡大という観点から重視していることが分かる。この頃欧米が中国への関与を強めていたことも背景に、欧米への対抗意識も日中関係の強化という視点に結びついているようである。また、親善の方策としては、日本側が中国に対して経済面や言論面における積極的な関与を行うことを支持していることも分かる。ただ親善を進めるうえでの注意点として、徳富はこのようにも述べている。

兎角日本人が、支那を解せず、支那人を解せず、又た解せんことを畧めず。唯だ短慮一徹に、我が思ふ所を、遠慮會釋もなく、之を支那及び支那人に施し、而して是れ則ち親善なりと云ふに到りては、下戸の頭上より酒を浴せかけて、自から快なりとするの類にして、下戸の身に取りては、眞に難有迷惑なる可し⁴⁸。

ここから、積極的な関与を日本がするにしても、その関与は中国への理解が前提であるとの考えを徳富が持っていることもまた分かる。

このように徳富は、1910年代までは、親善の方向性を取り、日本が中国を理解しながら利用することで両国の関係を強化していこうという意識を基礎にした日中関係観を展開していた。

（第三節）吉野作造の日中親善論

吉野も徳富と同じく、1910年代には基本的には日中親善の方向性をとっている。『日支交渉論』のなかで、吉野は、「日本の対支政策の根本的理想」は、「支那を援け、支那と提携

⁴³ 同上、463頁。

⁴⁴ 同上、404-405頁。

⁴⁵ 同上、498頁。

⁴⁶ 同上、500頁。

⁴⁷ 同上、380-385頁。

⁴⁸ 同上、389-390頁。

し、支那も日本も共に東洋の強い国として、有らゆる方面に勢力を張り、以て世界の文明的進歩に貢献する」ことにあると主張する⁴⁹。

また、中国を援助する理由としては、日本が東アジアの中で、「独り天狗」となってしまふことへの危険性をあげ、東洋の平和と日本の将来の発展を考えると間近に中国という強国を作ることには意義があるとしている⁵⁰。この、中国を強国化することによって日本を奮い立たせるのがよいといった旨の主張は、「日支親善論」（1916）等の論考でも繰り返しなされている。ただ、日本側の援助が上手くいかず中国が強国化しない場合に備え、日本の利権を拡張する必要性も吉野は述べている⁵¹。ただし、この際も日本の利権拡張のための要求は最小限度にとどめておくべきとしている⁵²。「我国の東方経営に関する三大問題」（1918）においては、援助だけでなく経済面での日中の相互協力についても述べられている。吉野はこの中で、従来の中国政策が国防に偏ったものだったと指摘し、経済面でも全面的に日本は中国と提携し欧米の進出を防ぐ必要があると主張している⁵³。

さらに、吉野は中国で広がっていた排日の動きについても繰り返し触れ、排日の動機として、日本人自身の中国への態度の悪さと、中国人の事大主義を挙げている⁵⁴。事大主義というのは、勢力が大きい方に頼った方がよいという考え方のことで、この場合具体的には、中国人が日本ではなく欧米の方に頼ろうとする姿勢を見せることを表している。こうした状態を解消するために、吉野は『日支交渉論』においては、日本人への観念教育と中国を強国にする援助を同時に行うべきであると述べている⁵⁵。また、「日支親善論」では加えて「精神的交通の欠如」が日中親善を妨げる要因として挙げられている⁵⁶。精神的交通というのは、経済・政治面ではなく、国民間かつ人道的方面で行われる交流の事であって、吉野は純粹なる人道的精神の必要性を訴え、精神的交流の担い手として思想家・文学家・芸術家等の人物に期待をかけている⁵⁷。「我国の東方経営に関する三大問題」においても、「根本的に日支両国の親善の回復」をし、「堅実なる基礎の上に経済的提携同盟」を打ち立てるためには、「勢ひ進んで日支両国民の精神的融和」を図ることが急務であると説いている⁵⁸。吉野にとって、親善のためには日中の精神的連帯は不可欠だったと見てとれる。こうした姿勢について広野氏は、「決して軽視してはならない」と評価したうえで、吉野は「単

⁴⁹ 吉野作造「日支交渉論」（『選集8』）134-135頁。

⁵⁰ 同上、135-136頁。

⁵¹ 同上、150頁。

⁵² 同上、151頁。

⁵³ 吉野作造「我国の東方経営に関する三大問題」、同上298-305頁。

⁵⁴ 吉野、前掲「日支交渉論」、同上136-137頁。

⁵⁵ 同上、138-139頁。

⁵⁶ 吉野、「日支親善論」、同上208頁。

⁵⁷ 同上、216-219頁。

⁵⁸ 吉野、前掲「我国の東方経営に関する三大問題」、同上305頁。

に中国を経済進出の場と見たのではない」と述べている⁵⁹。この指摘の通り、吉野は中国を単に経済的に利用することを超え、精神面でも強固な関係性を期待していたと考えられる。

（第四節）両者の比較

両者の日中関係への視点を比較してみると、どちらも日中親善の方向性を1910年代頃にはとっていたと分かる。しかしながら、親善の動機やその方策については異なっている。徳富は、日本の利益を中国大陆で拡大し、中国を利用するために親善を主張しているが、吉野は日本の発展の起爆剤とするために中国の独立支援を主張している。中国に対して、より利用や干渉の度合いが強いのが徳富である。また、親善の方策については、徳富が経済や言論について述べているのに対し、吉野は経済的交流に先立つ精神的・文化的交流を重視している。徳富が親善の要素としてあげる両国民の思想・感情の共通は、吉野の主張する精神的・文化的交流とは似て非なるものである。徳富はプロパガンダという言葉にもあらわれるように、戦略的に日本側の主張を中国に浸透させ両国民の思想的共通をはかるという主張だが、吉野は文化的人材に着目して、両国民の相互の交流をはかっていくという主張をしている。このように、親善の方策においても、徳富はより中国へ干渉しつつ日本の利益のため利用するという意図をにじませるのに対し、吉野の方は日本の利益を二の次にした相互理解のための人的交流に重きを置いているといえる。

ではなぜ多少似通った日中親善の方向を取りながら、徳富は干渉の意図が強く吉野は純粋な親善交流の意図が強くなっているのだろうか。まず一つ考えられるのは、両者の人物像の影響である。両者の意図の違いは特に精神的交流・言論面での中国への働きかけに現れている。徳富はジャーナリストであり、新聞社も経営している。学者の吉野と比べると、徳富はある意味言論を大衆に向けて届ける専門家といえる。そのため、徳富の言論の戦略的利用という観点は、自身のバックグラウンドを日中関係においても十分に活用するものとして出てきたと考えられる。

もう一つ考えられるのは、1910年代頃の両者の思想の対称性の影響である。前述のように徳富はすでにこの時期帝国主義への変節を遂げている。変節以前の徳富は、『将来之日本』において、武備による統制で支えられた封建社会は、生産機関の発達により個人の平等で自由な関係を基礎に構築される平民社会へと移行したと指摘したうえで、「平民主義」は世の中の大勢であると述べている⁶⁰。加えて同書では軍備の徒な拡張を否定的に捉え⁶¹、貿易による平和主義も主張している⁶²。しかし変節後には、「平民主義」を完全に捨て去っては

⁵⁹ 広野好彦「吉野作造中国論おぼえがき」（『法学論叢』、121巻6号〔1987〕）81頁。

⁶⁰ 徳富猪一郎『将来之日本』（経済雑誌社、1887）

⁶¹ 同上、207-209頁。

⁶² 同上、96-105頁。

いないものの、その主張の内容は大きく変化している。この変化に関連して、和田守氏は大正デモクラシーの民衆運動に直面した徳富が「国家的膨張も多数国民の支持協力なくしては成り立ちえないことを痛感」し、「帝国主義と平民主義の提携を説くにいたった」と述べている⁶³。そして、普通選挙を『『個人的』観点からではなく『国家的』観点からの権利行使』と捉えた徳富の姿勢を示したうえで、「平民主義は個人的性格から国家的性格へと大きく転換」したと結論付けている⁶⁴。こうした帝国主義を堅持しようとする徳富の態度は、対外的関係についても同様に示されたと推測でき、日本の影響力を大陸へ拡大するためにはどうすればよいかという視点で中国との関係を見ていると考えられる。一方で吉野は、1916年に「民本主義」を提唱し、個人の自由や幸福、権利を重視する姿勢を示した。また、第一次世界大戦後に発表した「國家生活の一新」(1918)では、大戦中に「侵略主義、軍國主義、資本主義、階級的特権主義等」への反感が高まり、反対に「自由平等、博愛平和若くはデモクラシー等に對する熱烈なる憧憬」が生じたと指摘し、これらの主義思想が「世界を支配すべき不動の原則として確立した」とまで述べている⁶⁵。吉野は徳富とは逆に、帝国主義や国家主義と距離を置き、個人の尊重やデモクラシーを軸に平和的な国際関係を構想していた。吉野が中国に対し干渉より精神的交流を重視したのは、このような平和主義が影響していたと考えられる。

このような、両者の同時期の思想の違いが、同じ親善という観点について述べていたとしても、異なる意見を両者に持たせる要因となったといえるだろう。

(第五章) おわりに

最後に、両者の中国観から両者が同時代の日本に対してどのような目線を向けていたのか、つまり日本に対し東アジアにおいてどのような役割を期待していたのかを考察する。

徳富は「征清の眞意義」のなかで、「世界の眼中に於て、大日本國は、一大跳躍を倣せり。彼れは眇焉たる東僻の島國よりして、今や世界に於ける、雄國の一に列せんとす」と述べている⁶⁶。吉野は「我国の東方經營に関する三大問題」の中で「言ふまでもなく、我が日本は東洋に於ては一番傑出したる民族である」と述べている⁶⁷。この一記述からでも、両者が日本や日本国民に対しては、その発展や勢いに高い評価を与え、他国を先導する役割を期待していることが読み取れる。両者ともに東アジアのリーダーとしての日本像を思い描いているわけだが、そのリーダー像には若干の相違があると指摘できる。その相違は両

⁶³ 和田守、前掲120頁。

⁶⁴ 同上、125頁、128頁。

⁶⁵ 吉野作造「國家生活の一新」(前掲『世界平和主義論』) 72-73頁。

⁶⁶ 徳富、前掲「征清の眞意義」(『文選』) 330頁。

⁶⁷ 吉野、前掲「我国の東方經營に関する三大問題」(『選集 8』) 290頁。

者の、中国に対する日本の態度への批判に現れている。

徳富は『支那漫遊記』の中で、当時の中国における日本語の勢力や言論面の衰退に関し、欧米と比較して日本の政策の詰め甘さを批判していた。経済面でも徳富は欧米と比較して日本の政策の問題点を指摘している。このような批判から見える、中国政策にまつわる欧米への強い対抗意識からは、徳富が日本を、東アジアにおいては欧米を遠ざけて圧倒的な影響力を持つリーダーたらしめたいと考えていたことがいえる。徳富が志向するようなリーダー像からは、日本と他の東アジア諸国の間では明確な上下関係、支配被支配の関係が構築されるとも考えられる。

一方の吉野が問題視しているのは、日本が政策を進めるうえでの中国理解の甘さであり、傲慢さや野心を持って中国政策を進めてしまうことである。ここからは、吉野は日本に対して周囲を尊重し、周囲から刺激を受けながら成長する謙虚なリーダー像を求めていたと考察できる。吉野も日本の優位性は認識しているため、日本と周辺国が完全に対等とまでは考えなかったかもしれないが、徳富と比較すると周囲と対等な関係性を構築しようといえる。

このように両者の中国観からは、日本の立ち位置に対する認識の違いも考察することができる。

徳富と吉野の中国観を比較すると、両者は同じ観点に着目しながらも、当時の中国社会や日中関係に異なる視座を持っていることが分かった。そして両者の異なる立場からは、それぞれの置かれている立場や当時の思想的対照性が浮き上がってくる。

1920年代以降の両者の動きを見ていくと、徳富は政府により接近するような発信を行い、吉野は中国の革命運動を支援するという対照的な立場をとっている。吉野は1930年代にも中国論をいくつか発表している。徳富もこの時期にはさらに帝国主義・国家主義の色合いを強めていることから、この年代の両者の比較も今後行ってみたいところではある。

〈参考文献〉

- ・板倉弘明「『徳富蘇峰の中国観』に関する研究史の一考察」、『城西国際大学日本研究センター紀要』、2巻、79-86頁、2008年
- ・大川真「吉野作造の中国論—対華二十一ヶ条からワシントン会議まで—」、『吉野作造記念館吉野作造研究』、14巻、102-118頁、2018年
- ・尾崎護『吉野作造と中国』、中央公論新社、2008年
- ・佐々木隆『日本の歴史第21巻 明治人の力量』、講談社、2002年
- ・徳富猪一郎『将来之日本』、経済雑誌社、1887年
- ・徳富猪一郎『七十八日遊記』、民友社、1906年
- ・徳富猪一郎『支那漫遊記』、民友社、1918年

- ・徳富蘇峰『蘇峰文選』、民友社、1915年
- ・広野好彦「吉野作造中国論おぼえがき」、『法学論叢』、121巻6号、48-81頁、1987年
- ・藤田昌志「徳富蘇峰の日本論・中国論」、『比較文化研究』、No. 96、13-25頁、2011年
- ・山根幸夫「日本人の中国観：内藤湖南と吉野作造の場合」、『東京女子大學論集』、19巻1号、1-15頁、1968年
- ・吉野作造『世界平和主義論』、新紀元社、1947年
- ・吉野作造『中国・朝鮮論』、平凡社、1970年
- ・吉野作造『吉野作造選集3』、岩波書店、1995年
- ・吉野作造『吉野作造選集7』、岩波書店、1995年
- ・吉野作造『吉野作造選集8』、岩波書店、1995年
- ・吉野作造『吉野作造選集13』、岩波書店、1996年
- ・和田春樹他『岩波講座 東アジア近現代通史 第3巻 世界戦争と改造1910年代』、岩波書店、2010年
- ・和田守『徳富蘇峰 人と時代』、萌書房、2022年